センサー

1983年11月　第12号（林会長追悼号）

東京温度検出端工業会 会報

林会長を憶う

副会長 西村　明

まったく突然の事であった。林会長の悲報を最初に聞いた時は、思はず「悪い冗談だ。」と云ったものである。それが事実だとわかった時には深い悲しみと残念だったという感じが同時に湧き上ってきた。

林さんと私の交遊は古い。従って思い出を綴れば、仕事の面でもあの時、この時と数多いし、遊びの面でもスキーとか最近はゴルフなど少くないが、その内でも当工業会の設立当時の事は大きな思出として残っている。

十年余り前になるが、林さんからこの様な会を作りたいとの趣旨をうかがい、私も若干お手伝いをして、柴崎さんに会長をお願いし、当工業会の設立に漕ぎつける迄の経緯は今も鮮かに頭に残っている。その当時、設立には協力するが、会長職は忙しいので駄目だと固辞された柴崎さんに、いや雑用は我々でお引受けしますから、是非お願いしますと云って会長になって載いたものの、現実には設立当初の色々な問題があって度々会長に御出馬願う事になり、何の事はない、柴崎さんを騙した様な事になり誠に申訳なかったと後で林さんと話合った事もあった。

その後林さんが二代目の会長となられ、当会の発展に尽力された事は御承知の通りであり、先般当会の十周年記念の祝賀会には関係各方面の方々においでを戴き、林会長から当会の今日迄の歩みと今後の展望を述べられた。関係の皆様からお祝いの言葉と共に今後の当会に対する協力を表明していただいたのはつい先日の事であった。これからの会の発展が大いに期待される処であったのに、中心人物を失った事は何にも増して当会の損失であり、今後どの様になるかが憂慮される処である。

仕事を離れての林さんの思出も多いが特に永年の夢を実現してヒマラヤの冬期登山隊の隊長として遠征を成功させた後、遠征の際のばした髭をそのままに頭にはネパールの帽子をかぶった仙人の様な風貌の林さんを思い出す。

林さんの御冥福を祈ると共に会長の遺志を継いで当会の発展に向け皆様の御協力をお願いする次第である。

林さんを偲んで

前会長　柴　崎　昌　雄

先日の追悼式に参列して心から生命の儚なさを痛感致しました。先日迄あれ程元気で御活躍されて居られたのに、事故とは云へ何と云ふ悲しい事でしょう。故人とのおつき合いを思い出すにつけ残念でたまりません。人柄、人格そして人情味等すべて人並以上に優れたあの大人の面影が偲ばれます。

検出端工業会を発足させる前は林さんとは面識程度のおつき合いでしたが、創立以後は公私ともに親しくおつき合いさせて戴きました。

山岳会のメンバーとして活躍されて居られた当時から情熱的な実践家であったとうかがっております。

思い付や一時的な仕事振りではなく常々積極的に問題と取組んでこられた御様子は私の記憶にしっかり刻まれております。工業会の発足は林さんと西村社長さんと同道で吾社に来られて当時の検出端業界の状況を話題に話し合ったのが切掛けでした。

丁度オイルショックの余波を受けていた時で矛盾した事項の多い状況でした。技術の遅れと、価格の不均衡や情報連絡の不足等で各業界は全般的に困った状態だったのです。特に吾等業界では大半が小規模な企業であり、相互の情報連絡が悪い状態でした。

各社相互間のコミュニケーションを円滑化し、又相互による連繋を図るためにも業界各社を組織的にまとまることが必要でした。そこで工業界の発足を目的とする発起人会を作り有志に呼び掛けた次第でした。この起案を林さんは積極的に推進され実行されたのです。

工業会発足当初は私が初代会長で会の運営を任されました。すべてが初めての事ですので種々と問題に直面致しました。特に渉外事項で官庁関係の連絡には大変な尽力を戴きました。

其後会員相互間の親睦も進み会の内容も充実して今日現在の様な工業会の順調な伸展は、専門業界で注視されるところです。創立の端緒から理事として又は会長として今日の会の発展のため尽してこられた林さんに心から敬意を表します。と共に本会の充実と益々の発展を祈ります。

林さんの足跡は永く記憶と会史に残る事でしょう。

心から哀惜の念共に御霊の安らかに天に昇られる事を祈ります。

故 林会長の急逝を悼む

新栄熱計装㈱
社長 杉 本 嘉 正

故人とは西村工業㈱さんに在職中より顔見知りで独立されて神田に会社を持たれてより現在まで一貫して気持の良い爽かな御付合いをさせて頂いて居りました。七宝炉の売上目標達成記念パーテーを椿山荘で開いた時も呼んで頂き又仕事の面でも材料購入の面でも種々御便宜を計って頂いた事等感謝と感激の連続でした。故人は非常に暖かい感情を持っておられ何時何処でお会いしても美笑をたたえた品の良い人柄には無条件で裸になってお話をする事が出来おそらく会う人全部に信頼され慕われた人であったと思います。まだ雪ヶ谷に住われて居られた頃会合の帰りなど度々私の車で家までお送りした事がありました。其の折車の中で車の事など良く語ったので免許を取って御自身で運転されるようになった原因を作ったのではないかと些か責任を感じる次第です。事故にあった時も私の乗って居るトヨタのソアラと同じ車だしお会いした時はいつも車の具合良さを話してくれました。

最後にお会いしたのは9月22日午後に五反田の卸売センタービルで光ファイバーに就ての講演会があった日でした。僅かな時間でしたが立話しで23日より25日まで商用で仙台へ行くので足を延ばして盛岡市東北方40㎞の処にある安家川と云う山女の宝庫と云はれて居る（八島製作所の八島社長の話）渓流があるので東北高速道を車で行くのだと云った処車より新幹線の方が良い。若し車で行くならスピードや居眠り運転には呉々も気を付ける様にと云はれたのに御自分が事故で昇天されるとは全く一寸先は暗です。今でも此の時の言葉が耳に残って仕方ありません。

9月の初めにお会いした時10月に米国へ行きホスキンスとC.S.ゴードンへ行く予定との事若し暇があるなら一緒に行かないかと云はれたが私も11月6日より20日まで上海で熱処理技術及設備等に関する国際会議があり参加する事になったので其の用意の為残念だが行かれない又其節はゴードン社長に宜敷く伝えてもらい度いと云ったばかりなのに一ヶ月も過ぎない内にこんなひどい災難に合うとは全く残念でなりません。今となっては詮ない事乍ら故人と約束をして果す事の出来なかった事が二つあります。其の一つは釣り上げた生きの良い山女を持って行ってやる事ともう一つは時々台湾へ行った折に入手してきた東洋蘭が40鉢和あり其の中に非常に香りの良い花の咲く蘭があるので此の花が咲いたら一鉢持って行って差上る約束をした事です。魚の方は殺生故遠慮するとして蘭の方は早く実現したいと思って居るが香りの無い花のみ良く咲いて香りの良い方はなかなか咲きません。天国で故人が笑って居るかも知れませんが香りの良い蘭が早く咲いてくれないものかと今朝も水をやって居ります。

林さんを偲んで

㈱八島製作所
社長　八　島　　実

林さんとの思い出をと言われて、ペンを取ってはみたものの、手許の受話機から、
「どう、元気でやっている？」
と、暖かな声が聞こえてくる様な気がして、彼が昇天したなどとは、いまだに信じられません。社会人として先輩でもあり兄貴でもあった故人の生前を偲び、思いつくままに書きつらねてみます。

思えば林さんとの出会いは、四十代半ばの彼が林電工を創立し、三十代後半の小生が、すでに十年を経過しながら一向に芽の出ない会社を背負っていた頃の事でした。当時は金融状態が逼迫しており、お互いに協力しあって乗り切ってきましたが、
「八島君、吾々は地味にゆっくり行こうや。」と、よく慰められたものです。

食通の林さんが当社に来られる時は、いつも有名店のケーキを持参され、仕事の話が一段落しての帰り際には、必ずのように「八島君、そのうち旨いものを食べに行こうや！」
と、言われるので、小生等飲兵衛仲間には全くありえない会話なので、一瞬の戸惑いを覚えた事もありました。

何時だったか、知名人の艶聞がゴシップになり、なんやかんやと口さがない吾々ヤジウマ連のところに来られて、一言、
「人間的でいいじゃあないか。」
と、さわやかに一笑に付されました。人を咎めず温かく許していく故人の面目躍如たるものがあります。又、その人徳によって、巾広い人脈を持たれ、斯界に顔の広い方でした。

温顔の内に、静かなる闘志を秘められ、事業の拡大をはかられる一方、山にゴルフに車の運転にと、人生をエンジョイされた方でした。などなど、限りなくなつかしく、チョットペンを休めると、ヒマラヤ遠征隊長の重責を成功裡に掌中に納め、乃木大将そっくりのあごひげにて帰国された時の嬉しそうな、得意そうな林さんの面影が彷彿として眼前に浮かび、眼がしらがあつくなります。

終りに、奥様はじめ林電工の皆様には、故人の遺業を受けつがれ、社業の益々の御発展につくされる事を願うと共に、あまりにも突然に逝かれてしまった故人を惜しみつつ、御冥福を心からお祈り致します。

追　悼　文

相互電機㈱
社長　荻　野　紘　一

会長の突然の訃報に接し、私どもの驚き、これにまさるものはなく、ただただ哀悼痛惜の念にたえません。

かえりみますと、会長は今から十年前、当会の発会にあたられ、お互いライバル同士であっても本業界が団結し、協力するところはお互いに協力しあわなければ……そして本業会のレベルを少しでもアップしたいという信念をもって、当会をリードされて来ました。当会が本年五月に創立十周年記念行事を盛大に行うことができ、各外部団体、関係庁省などの関係者に少なからず注目を浴びる様になれましたのも、ひとえに会長の意欲と熱情があったればこそと、今さらのように思いかえ

さずにはいられません。

会長は一方、人情家で、誰に対しても細やかな神経を使っておいででございました。私にまで、その後体の具合はどうか、などと心くばりをいただき、大変恐縮で、うれしく思っておりました。

しかるに、会長が広く産業界について精通しておられ、当会もこれからという時に、こつぜんと他界されましたことは、かえすがえすも無念でございます。

しかし会長の偉大な業績は、当会発展の礎となることでしょう。

私どもも会長の遺志を継いで霊にこたえる所存です。

林　会　長　へ

助川電気工業㈱東京支店長

佐　藤　　一

未だ信じられない。今にも「佐藤君」と言葉をかけられそうだ。理事会で議題が終了すると、いつも一人、一人の顔を見ながら「景気はどうですか」、「助川さんはどうですか」と、にこやかに問われた。その都度、「いやあ大変ですよ」と答えて、それから私の実感で、実情をありのまま説明した。実はそれが理事会出席の楽しみの一つでもあり、次はどう説明しようか営業の励みとして、考えもした。常々親しみの言葉の中に、心温まる豊かさを抱かせていただいた。これからの私の人生を語りもし、相談もしたかった。私にとってあまりにも失なわれた一瞬の重さに打ち拉がれる思いである。然しながら今後の道として、当工業界の一員としても、微力ながら当会発展の為に些かなりとも寄与したいと思う。最後に心から御冥福を御祈り致します。

林会長の思い出

事務局長　八　木　　晋

9月25日林会長が不慮の事故により、突然になくなられた事をきいた時は全く天地がひっくりかへったように驚きそして心から悲しく残念に思いました。思えば私が昭和25年に当時の西村工業販売㈱に入社して以来33年間公私共にお世話になった私にとって正にかけがいのない方でありました。工業会の事務局長としての思い出よりもさきに西村工業時代の事が思い出されるのをお許し下さい。

林さんが西村工業をおやめになって自分で林電工㈱をおはじめになる昭和36年までの11年間は直接の部下として、みっちり仕事を教へていただきましたし、人間としての生き方考え方についてもクリスチャンである林さんの純粋さ、誠実さに深くうたれ教えられてきました。又山とスキーに情熱を燃やしていた林さんにつれられて上高地の山々や富士山に登り、北海道の冬山をラッセルさせられた事もありました。いつか暴風の中を熊の湯から横手山を越して草津へ出ようとして山中で雪庇が崩れ遭難しかけた時の事は林さんにも相当強烈な思い出だったらしく会う毎に度々話をしておりました。林さんが西村工業をやめられた後会社の命令で営業の責任者として今日までやって参りましたが、それ迄に林さんが築かれた基礎の上で林さんに教へられた知識と仕事に対するやり方、考へ方により何とか大過なくやって来られたのも、ひとへに林さんのお蔭だと思っております。いつもこのような時、林さんならどうするだろうかと思いながらやって参りました。その間林さんは林電工㈱を設立され大へんな御苦労をなさりながら非凡な才能と技術、不屈の努力によって今日の立派な会社にお育てになりました。その間も私は公私共にお世話になり御指導をいただいて参りま

した。ゴルフを始められたのは私よりも大部あとで、はじめの頃は私の方がうまかったと思いますが間もなくまったくカモになって了いました。

昭和48年林さんが主唱されて東京温度検出端工業会が生れ、大昌電機㈱の柴崎社長を会長に西村工業が事務局をお引きうけすることになりました。その後林さんが自ら会長になられ今日まで10年間会を運営してまいりましたがこの間は1週間に1～2度電話で打合せしたりお会いして相談したりして参りました。林会長が理想とされた業界の秩序ある発展、標準化や技術の向上、それに会員相互の親睦というようなことをどのように具体的な事業にするか会長の意向を伺いながら理事会に提案し実行して参りました。先般は創立10周年の祝賀会に関係方面の来賓をお招きしようやく通産省からも団体として承認されこれから本当に会としての活動を本格化していく基盤が出来た所でその中心の林会長の急逝にあい正直の所いささか途方にくれております。心から林会長の御冥福をいのりつつその御遺志をつぎ何とか会の発展を計って行きたいと考へておりますので会員各位のより一層の御協力をお願いいたします。

出合いと、別れと、

林電工㈱常務取締役
鈴　木　隆　夫

林さんが西村工業の取締役をやっておられる頃、私も西村工業に勤務しておりましたが、全く違う仕事をしておりましたので、林さんとは仕事でも、個人的にも、ほとんどおつきあいがありませんでした。

そんな私の結婚式でのことです。日本YWCAで結婚式を挙げたものですが、当日になって司会をしてくれる人が急に出席できなくなり、私は全く弱り果ててしまいました。私は林さんがクリスチャンであられることは存じておりましたので、当日式に出席してくださった林さんに、いきなり、司会をお願いしました。林さんは全く突然のことでしたのに、私の窮状を察して、心よくひきうけて下さり、あざやかに司会をして下さいました。これは今も深い感謝と共に、私の思い出となっています。人の困っているのを見ていられない林さんをよくあらわしています。

西村工業には当時飼料部があり、実はこの仕事は、林さんが西村工業を退社される原因になったのですが、私はその営業をしておりました。当時漁業会社が一斉に畜産業に乗り出し、そのあおりで飼料界は競争が激化し、それに巻き込まれたのと、私自身の不手際もあって、多くの不良債権をつくり、会社にご迷惑をお掛けしましたので、私は西村工業の飼料部撤退を機に、責任を感じ辞表を呈出しました。そんなある日、私用で池上線に乗った私は、バッタリ、林電工の林社長にお会いしました。お互にびっくりしましたが、「こんなところで何をしているの。」ということになり、西村工業を退社したことをお話ししました。人の出合いとは、こういうものでしょうか。このことが、西村工業では林さんとは逆の立場にあった私が、林電工にお世話になることになりました。それから一年程たって、林電工の経理担当者がいなくなったことから、私に入社して経理を担当してもらえないかと、いうお話がありました。私は船橋の方の会社に勤務していたのですが、林社長のお宅を訪問しました。林社長は林電工の現況を紙に書いて説明してくれました。私は今でもそれを記念にとってありますが、当時（昭和38年）の林電工の月商は5百万位、資番繰りもぎりぎりで、林夫人は料理教室をして助けておられました。会社はその夫人や、ご親戚から緊急の金を借用したりしていました。しかし林社長は、自分の給料は遅れても、社員の給料は遅らせたことはないと言っておられました。私はその時先づ社長に、会社の経営のやり方には、個人色を強くして、すべて独裁で引張ってゆくやり方と、あくまで個人と会社とを切り離して、会社は別個の経営体として育ててゆくやり方とあると思いますが、どちらを選ばれますか、とお聞きしました。社長は「僕は後者を

選ぶよ。」と云われました。そこで私は、入社すると共に、林個人と会社とを混同しないこと、資金繰りを銀行借入にしぼることに力を入れました。前者の為には林社長個人にとっては随分聞きにくいことや、腹の立つことがあったと思いますが、私の生意気な意見をよく聞いて下さいました。社長自身も、身内には会社の株は一切もたせないなど、ずっとその方針を通してこられました。又決算の度に社員に決算内容を説明することを提案しました。これは会社の秘密事項もからみ、多少難色がありましたが、とりあげて頂き今日迄続いております。社長も、積極的にこれと取り組み、社員に対するガラス張り経営を心がけ、自分達の参加する経営という社風を作り上げてゆきました。

私は又、入社の折、これも生意気にも、経理などというものは、数えてもお金が増えるわけではないから、営業もやらせて欲しいと申しました。すると、「実は今ジエットウオッシャーを開発している。社運をかけてやってみようと思う。これなら君にも売れるだろうから頑張ってくれ。」と云われました。このウオッシャーは科学機器展に展示しましたが展品から水が漏って、下にプレートをひいて、溜った水を汲み出しながらショーをやるという離れわざをいたしましたが、社員みんな若さにまかせて憶せず頑張りました。しかしこういう、何とかして自社ブランド商品を作ろうという、社長の努力が、やがて自動面積計という、世界的にも評価された商品や、七宝の仕事を生みました。

こうして次第に社業も安定してきましたが、その頃年末に賞与を出し終ると、「君、これで、一年無事に終って良かったね。ほっとするね。」そう云って、私の手を握りました。私も思わず目頭があつくなって、思わず、二人で強く手を握りあいました。これはいつか、二人の年中行事になり、一年の心の安らぎとなっていました。そして、今年も又そうするはずだったのですが……。

一方創立以来手がけてきました温度検出端の仕事は、なかなか利益の出る仕事になりませんでした。或年度は多少利益が出ても、次の年度は欠損が出るなど原因がつかめませんでした。最大の問題はメーカーの立場でありながら利巾が少いということでした。そこで徹底して部門別の利益計算をして、10年位たって、やっと利益が出るようになりましたが、その過程でつくづく思わされたことは、個々の会社の努力だけではどうにもならない問題が検出端業界そのものの中にもあるということでした。業界全体の産業界の中での地位の向上、レベルアップ、又環境を変えていく必要があるということ等でした。林社長も強くそのことを感じ、皆様と共に、本工業会の発足に努力いたしました。このような団体を作り、推進してゆくことは、批判することは簡単ですが、まとめてゆくのは大変むづかしいことです。今日まで推進されてきた方々に敬意を表したいと存じます。

林社長は検出端工業会に限らず、よく団体のお世話をしましたか、こういう新らしい企画をするとき、批判を恐れず実行する人でした。

林電工で、検出端の業務について、問題を感じていることは、恐らく皆様も同じように感じておられることと思います。どうか皆様お一人、お一人が推進役の側に立って頂いて、この工業会を実りある団体に育てて頂きたいと願っております。故人もどんなにか、それを願っているかと存じます。

又、林社長は、役者に例えれば、舞台で見得を切るのが大変上手な人でした。桧舞台の幕があがる。役者が舞台に上る。大向うから声がかかる。パッと役者が見得を切る。舞台を演出することも大変ですが、でき上った舞台で見得を切るのも、誰にでもできるということではありません。林社長は、まことにこれが、さまになる人でした。そして劇的に、その生涯の幕を閉じてしまいました。

これからは、誰方か、検出端工業界を代表して、産業界に対し、大きく見得を切って頂きたいものと存じます。

人と、人との出合いは、思いもかけぬ所から始り、思いもかけぬ終焉を迎えるものと、今感慨を新にしております。

終りに、故人にお寄せ頂いた弔意に、厚く御礼申し上げます。

理　事　会

8月3日定例

◎8～9月に講演会を行う。講師日刊工業新聞社吉田幸生氏。林会長接拶。
◎9月技術講演会。テーマ光ファイバーについて。田中貴金属担当。茨城通研と接拶。
◎10月に工場見学会。保谷硝子と国際電気を計画。田中貴金属と事務局で接拶。
◎11月一泊見学会。仙台地区。事務局で接拶。

10月5日定例

◎林会長急逝に伴い西村副会長が会長を代行する。会長は空席とし明年3月までに後任会長を決定する。
◎12月～明年5月行事予定。
①会報第12号を林会長追悼号として発行する。
②第9回懇親ゴルフ大会。12/3か12/2に計画。
③12月第9回技術懇親会（工技センター）及合同忘年会。
④59年2月新春懇親会開催。
⑤59年3～4月に技術講演会を計画。
⑥59年5月第11回定時総会
⑨新会員名簿を早急に発行する。

会の動き

◎6月30日通産省計量課の関連団体調査表、様式A、B提出。
◎7月20日技術懇談会（工技センター）出席19名
テーマ
(1)　工技センターに於ける。
a）B、R熱電対の高温度における較正業務。
d）改良した温度計試験水槽。
(2)　熱電対の劣化事例について自由討論。
◎9月6日講演会「中小企業の技術振興について」講師日刊工業新聞社論説委員吉田幸生氏
出席13名
◎9月22日技術講演会「光ファイバーケーブルについて」講師日本電信電話公社茨城通信研究所線路研究部石田之則氏出席25名。
◎10月21日工場見学会。㈱保谷硝子武蔵野工場及国際電気㈱羽村工場。参加者29名

以　上

工業計器生産実績（通省産業省機械統計月報による）

（%は金額の対前年同月（期）比）　　（通産省生産動態統計（機械統計）による。

品目名				58年 2 月			58年1月～2月		
				数量（台）	金額(百万円)	(%)	数量（台）	金額(百万円)	(%)
工業計器	プロセス用工業計器	発信器	温度計	15,835	440	—	89,863	2,405	—
			流量計	4,571	933	—	32,561	7,949	—
			その他	7,183	1,374	—	42.531	6,995	—
			（小計）	(27,589)	(2,747)	—	(164,955)	(17,349)	—
		※受信計	指示・記録計	12,594	1,292	—	81,014	8,732	—
			調節計	18,079	1,437	—	82,430	6,668	—
			補助機器	9,723	796	—	65,729	5,193	—
			（小計）	(40,396)	(3,525)	—	(229,173)	(20,593)	—
		操作器		2,991	357	153.9	11,701	1,728	128.0
	プロセス用分析計			1,023	268	—	6,692	3,515	—
	プロセス監視制御システム			3,223	3,063	106.7	24,677	22,151	116.2
	その他の工業計器				3,391	—		26,248	—
	（合計）			(75,222)	(13,351)	90.6	(437,198)	(91,584)	98.0

編集後記

全く悲しいことに、この「センサー」12号は林会長の追悼号となってしまいました。10周年記念号を出したその次の号が会長の追悼文でうめられてしまうとは誰も予想できないことでした。この「センサー」の編集にたずさわり毎号巻頭言を書いていただいておりましたが、その都度ユニークな文章を書いていただき大助かりでした。しかし、その会長も、もういなくなってしまいました。これからはその遺志を継いで活動を続けてゆくほかはありません。「あまりボヤ ～ してるな!!」などとおこられないように頑張ってゆきたいと思っております。

なお、今回の追悼号を発行するにあたり、多くの方々から追悼文をいただきました。ありがとうございました。

昭和58年11月発行　No.12

発行所　東京温度検出端工業会

事務局

東京都品川区西五反田1－13－11（西村ビル）

電話　494－0671